
轢き逃げ

ヤマダ天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

轢き逃げ

【Nコード】

N0732C

【作者名】

ヤマダ天使

【あらすじ】

ひとをひいてしまいました。そのことを、だれかに、きいてもらいたいです。

夜中だった。昼間ならどこにいても聞こえる高速道路の唸り声も今はなかった。私は誰にも見つからないように家を出て道端に止めてあったオートバイに跨った。キーは刺さったままで誰のかしらないバイクは想像していたよりずっと静かな音を響かせて走り出した。私は何回か横転しそうになったが、団地を抜けてスピードを上げるとバランスを崩すことはなくなった。

小さな林の横を通ってまっすぐ走ったりときどき曲がったりふと橋の上で月を見るのを止めると前方の明りの下に人影を見た。橋の下は池で鯉がたくさん泳いでいるので有名鯉が付く名の池と橋だった。鯉のことを想像しながら人影が通り過ぎるのを見た。橋には端と端に名が書かれていたがなんと書いてあるのかわからなかった。橋を通ったあと私は人を轢いたのだと思った。

私は汗を流して赤い顔をシャツの袖で擦りながら、警察にあったときすぐばれないよう平穩にしてなければならぬと考えてなにもないような顔をつくった。冷静にさえしていればばれる可能性は低いと思っていたからそのことで自分を安心させるのは難しくなかった。私は常に私を客観的に見た映像を嫌でも私に見せつけ、少しでも不自然な言動が見えるたびに私をひやりとさせた。私は誰にも知られずに家へ帰り寝て起きたがどのようにして家へ帰りベッドに倒れたのか覚えていなかった。

私はそれと同じように自分の知らないまま学校へ行った。授業を受けながら私は何も知らない様に装うことを考えていた。休み時間になって友達と橋の上で死体が見つかった話をしても少し経つまで自分に関する話だと気付かずにいた。だが思考に余裕が生まれるたびに、私は、いつ警察が尋ねてくるだろうかと思像し、心臓が痛いほど鳴るのを聞いて、恍惚した。私はいつかばれるだろうと思っ
たし、仮にこのままなにもなかったことを考えるとそれは気持ち

悪く起きてはいけないことのように感じ、ばれた方がよいように思えた。放課後になっても警察は尋ねてこなかった。校門を出たところで待ち伏せているだろうか、それとも家へ帰る途中で呼び止められるだろうか、家へ帰るとみんながすべて知っていて、私は促されて警察へいくだろうか、さながら下ろせない拳を振り上げてしまった子供のように、私はそのときを期待した。しかし玄関へ来ると足は進まなかった。私は友達数人を呼び止めて下駄箱の前の広い空間で暇つぶしを始めたのだ。隠していた恐怖心がとうとう堪えきれなくなつて自分を守りに出たのか、それとも、むしろ学校にいればはやく捕まると踏んだからなのか、わからない。そんなふうだから事務室の扉を開けて警察官が私を呼んだときは夢が現実になつたような違和感や考えがそのとおりになつた喜びを誰かに伝えたい気持ちが大きく恐れや不安は見つからなかった。「ちよつときてくれるかな」と警察官は言った。やさしい声なのかきびしい声なのかは判別つかなかつた。でも騒ぎの様子で私は別件で問いただされるのならいいと希望を抱きそうでもなくても事情を聞かれるぐらいで済むだろうと確信していた。私は何度も練習した通り、なんのこともかわからず不安で一杯だという様子を警察官よりもむしろ驚きと興味を素直に表現している私の友人達へ向けて伝えながら内心動揺と冷静を交差させて警察官の指示する部屋に入った。

部屋にはもう一人いて嘘発見器だといつて装置を私の胸につけた。私は鼓動の早いのがばれると思ひ気付かれないように深呼吸した。警察官は橋の上に死体の見つかった経過に関する事件について知らないかと尋ね知らないと答えてから何があつたのか聞いた。昨晩のように客観的なもう一人の私は私たちの会話を映画かドラマのように私に伝え私はその映像に極力注意しながら振舞つた。もう一人の私は変なことを言わなければならぬだろうと言つたし変な事を言えばすぐばれるだろうと言つた。警察官は質問を続けた。もう一人はなにも言わずにずっと嘘発見器だという機械を見下ろしていた。「バイクに乗つたことはありませんか」

「いいえ」

「昨日の晩出かけましたね」

「えっ？」

私は全てのことを知られているように感じた。もう一人の私が見ていた映像はまったくの勘違いで彼らはただ私に告白させようとしているのではないのかと思い、すべての希望的観測があとに残さず消えていった。

「昨日の晩出かけたのはなぜですか」

「えっと」

答えを必死で考えるが見つからず言葉を濁しながら、自分は付く嘘が見つからず言葉を濁している犯罪者のようだと思った。私は答えを求めてあちこちに目をやり機械を眺めているもう一人と機械を見た。私は急いで鼓動を緩めようと努力したがどうやっていいのかわからず、そうしているうちに機械を見ていた男は笑って顔を上げ私を見て言った。

「古本屋に行っていたんでしょ」

私はつい「はい」と言った。男はまた顔を伏せて機械に戻っていた。

「古本屋に行っただんですか」

冷静になった私は不自然だと気付いてその質問が不都合な嘘を否定する最後のチャンスだとわかっていたがやはりはいと応えるしかなかった。「溺れるものは藁も掴むとはこのことですね」と言えるはずのない冗談を言っつて心臓を落ち着ける暇もなく警察官は表情を変えずまた質問した。

「何を売りましたか」

「何も売ってません」

「なにも売らなかつたんですか」

警察官はそう言っつて、嘘発見器の男を見るためにはじめて私から目を離した。

計器は激しく動いていた。そのとき扉を開けて誰かが部屋に入ってきた。私はそのことにとても驚いたふりをした。部屋に来たのは私

の旧友だった。彼女は興奮していたし、驚いた私を見て警察官二人は何か話して私にもう帰っていいと言った。計器が動いたのは突然人が来て驚いたからだろうと推測したならどんなにいいことだろう。私は家までの道を歩く間に旧友に事を説明し、今度は容易く嘘を付いている自分を卑下しながら事の露見を今は恐れていることに気付いた。それから古本屋に言ったのか聞かれてはいと言った自分や警察官がなにを考えていたのかを想像して心臓が冷たくなり良心というものがあるのなら自分のそれがなにかによって食いつぶされていくのを見て取った。私はもう駄目なのだろうと思い、すべてが面倒だと感じたが、昨晚人を轢いたバイクが道端にあるのを見つけたとき動揺を隠すのは止めなかった。彼女と別れて家の扉を開けるまでの数メートル私はとても寂しく孤独で少し安心した。

玄関には姉がいた。扉の半分開いたリビングからテレビの音が聞こえてソファからこつちを見ている父とキッチンで食事を作っている母の背中が見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0732c/>

轢き逃げ

2010年10月11日20時00分発行